

「それじゃあ、今日は……小鳥に色々するってことでひとつ」



「やったあ！」



「……………」

俺の答えを聞いて小鳥は喜び、涼子はさすがに悲しげな表情を浮かべた。

そりゃあそうだよな。

小鳥が来る直前までは、自分とする雰囲気になってたってのに……。

もしかすると、裏切られたって思っても不思議じゃないよな。



「じゃあ行こっ！ こんなダサいお店じゃなくて別のトコ行こっ！」

「あ、ああ……」

「その、涼子……またな……」



「はいはい。いってらっしゃい」

涼子が溜息をついて、手をひらひらと振る。

無理に引き止めるようなことはしないが、あれはかなり怒ってるときの態度だ。

何日も根に持つような女じゃないが、しばらくは店に顔を出しづらくなるかもしれないな。



「それじゃあどこ行こっか？」

涼子の店を出るなり、小鳥はニコニコした様子でそう尋ねてきた。

こいつ、自分が言ったことをもう忘れてるな。

「確か……なんでもしていいんだったな？」



「えっ？ あ……うん……」



「でも、さ、先に遊びに行かない？ エッチは夜でもできるし……」

「そうだな……」

確かにセックスは夜でもできる。

この雰囲気から考えて、小鳥が途中で帰るってこともなさそうだし……。

だが、何をしてもいいってところが今回のポイントなのだから、何をするかは今のうちに決め

てしまったかった。



「ねえ、荒浜さん。早く行こうよ～」



「小鳥、ちょっとショッピングとかしたいし」

「ショッピングねえ」

小鳥はよく『ショッピング』に行くが、実際のところ物を買うことは滅多にない。

あちこち店を回って商品を見るだけで、程よく満足できるらしかった。

そして、それに同行するのはちょっと疲れるというのが本音だ。

小鳥の買い物に付き合うのは、俺自身があまり楽しめないんだよな。

せめて、何かやれることがあるといいんだが……。

「……そうだ」



「えっ？」

「いい方法があるぞ」



「いい方法？」

「小鳥……何をしてもいいんだったな？」



「うっ……言ったけど……痛いのは、嫌だよ」

「大丈夫だ。痛くはない」



「顔がにやけてる……」

小鳥が不安げに言って数歩後ずさりする。

その直感は正しい。

むしろ、今からダッシュで逃げてもいいくらいだった。

「簡単なことだ。ショッピングにだって付き合っやる」



「……………」

「アイスのひとつくらい奢ってやるぞ」



「……………」

「どうする？」



「……絶対何かさせるつもりでしょ？」

「もちろん」



「何させる気なの？」

「大したことじゃない。ただ……」

「小鳥、パンツ脱げ」



「……………」



「……………」



「……………」



「はっ！！！？」

小鳥が素っ頓狂な声を上げる。

そりゃそうだろう。

誰だって同じような反応するはずだ。



「な、なにそれっ！？」

「言った通りの意味だ。 パンツ脱げばショッピングに付き合ってやる」



「え……えええええッ！！！？」

小鳥が顔を真っ赤にする。

意味不明という文字が顔に書かれているような表情だった。



「な……な……なんで？ なんで、パンツ、脱ぐの……？」

「いや、面白そうだから」



「今日、スカートなんだけど……」

「ズボンじゃやったって意味ないだろう」



「だって……そんなの……し、下から覗かれたら……見えちゃう……」

「そいつはすぐに逮捕だな。スカートの中を覗いて小鳥のマスコを見た悪い奴ですって」



「いやあああああああ~~~~~っ！！！！」

小鳥がちょっと泣きが入ったような声を漏らす。

まさか、こんなことを要求されるとは夢にも思っていなかったのだろう。

どうすればいいのかわからないといった表情を浮かべていた。



「じ、冗談、だよね？」

「いいや、本気だ。今日はノーパンで歩いてみようぜ」

「きっとすっきりするぞ」



「しないよっ！ するわけないよっ！！」

「新しい何かに目覚めるかもしれないじゃないか」



「目覚めたくないよおっ！」



「やめよう？ ねっ、他のことにしよう？」

小鳥が必死に訴えてくる。

楽しい。

困った様子とか、必死になってる表情を見るのが楽しくてたまらない。

可哀想なことしてるって自覚はあったけど、やはり小鳥相手だというのがやめられなかった。

「小鳥が何でもOKって言ったんだぞ？」



「それは……でも、こんなこと……」

「約束を破るのか～？ 小鳥はそんな悪い子だったのか～？」



「そ、そうじゃないけどお……」

女子学生にノーパンで歩くことを強要する俺。

誰が見ても変態だ。

でも、こんな変態行為を受けてくれる可能性がある女子学生。

それが、小鳥なのだ。



「か、考え直そ？ ねっ？ ショッピングのあとにいっぱいしょ？」

「だめだ。今日はノーパンな人と歩きたい気分なんだ」

「小鳥が約束を守ってくれないのなら……涼子のところに戻るとするかな」



「ああああっ！ 待って待って！ 待ってよおっ！！」

小鳥が大慌てで引き止めてくる。

ノーパンで歩くのは嫌だが、俺が涼子のところに行くのはもっと嫌なはずだ。

結局は、小鳥は俺の言うことを聞くしかないのだった。



「わかったからっ！ パンツ脱ぐっ！ パンツ脱ぐからあっ！」

「本当だな？」



「本当に脱ぐよお……」



「もおおお……荒浜さん変態いいい……………ツ！」

「何とでも言うがいい」

こういった楽しさが味わえるのなら、俺は変態にでも何にでもなろう。

ノーパンの女の子と並んで街を歩けるなんて、そうある事じゃないんだからな。



「はあ……じゃあ、ちょっと待ってて」

「ん？ どこへ行くんだ？」



「そっちで脱いでくる」

「待て。ここで脱げ」



「へっ！！？」

建物の陰へ移動しようとした小鳥に、俺は力強くそう命令した。

せっかくパンツを脱ぐんだ。

ここから、いわゆる羞恥プレイを始めなくてどうするというのか。



「こ、こ……ここって……ここで……ッ！！？」

「そうだ。ここだ」



「な、何言ってるの！？ こんな……ど、どこから、誰に見られてるかもわからない場所で……ッ！」

「大丈夫だ。見たところ誰もいない」

周りをぐるっと見回してみるが、人影らしいものはひとつもない。

どこからかこっそりと見られている可能性はあるが、それを気にしてはキリがなかった。

それよりも今は、小鳥が恥ずかしがる姿を見るほうが重要だ。

外で、目の前でパンツを脱いでくれるなんて、もしかするとこれが最初で最後かもしれない。

「ほら、早くしないと本当に誰か来るかもしれないぞ？」



「ほ、本当に……するの……？」

「本当にする」



「ど、どうしても、ここで？」

「どうしてもここで」



「ううっ……」



「き、今日だけ……今日だけだからねっ！ もうやらないからねっ！」

「おう、それでいいぞ」

ようやく、小鳥が了承してくれる。

顔を真っ赤にしながら、スカートの中に手を突っ込んでくれる。

そして——



「ハッ！」

——ささっとパンツを脱いだ。

一瞬の出来事だった。



「脱いだよ」

「……………」



「あれ？ なんで不満そうなの？」

「いや……もう少し……こう、な……」

色っぽさのカケラもない。

確かにささっと脱いだほうが恥ずかしい思いをする時間も短いけど、できればもう少しじわじわと脱いでほしかった。

しまった。そういう条件も追加しとけば良かった。



「ううっ……なんかスースーする」



「スカート、少し長くしとこ」

「だめだ。 そういう小細工は禁止だ」



「えええええ〜〜っ！！」

「ショッピングするんだろう？ 行くぞ」



「ううう〜〜っ、荒浜さんの鬼〜っ！ 悪魔〜っ！ へんた〜いつ！！」

「はっはっはっ！」

小鳥の罵りもまた心地良い。

最高にハイな気分だった……。



「う、ううっ……」

「ん～、いい天気だな」

よく晴れた空を見上げながら、俺はわざとらしく明るく小鳥に話しかけた。

周りからすれば、全然不自然じゃない言葉。

たぶん、仲の良い兄妹が出かけてるくらいにしか思わないだろう。

だが――



「ううっ……ふ、あ……ああ……」

小鳥は顔を赤くして肩を縮こまらせている。

理由は至極簡単。

今、小鳥は全く下着をつけてないからだ。

しかも、あえてスカートの短い学生服を着ているものだから、空の青さなど気にする余裕がないはずだった。



「荒浜さん……やっぱり、帰ろうよ……」

「なに言ってるんだ。 せっかく出てきたのに」



「だって、これ……み、見えちゃう……」

「大丈夫だ。 真下から覗き込まれないかぎり見えたりしないって」



「ううっ……」

すでに小鳥は半泣きの状態だ。

周りを気にしながら、不安げに俺のほうに身を寄せている。

ちょっと可哀想な気もしてくるが、ビクビクした様子が小動物のようで可愛らしくもあった。



「ど、どこまで行くの？」

「さて、どこまで行くかな」



「そ、そんなぁ……」

「早く帰りたいって感じだな」



「当たり前だよお」

そりゃそうだ。

帰りたくて当たり前だ。

でも、小鳥の頬が微かに赤みを帯びているのを、俺は見逃してはいなかった。

「少し風が出てきたな」



「う、うん」

「急に強い風が吹くかもしれないから気をつけ——」



「え……？」

言ったそばからこれだ。

急に強い風が吹いて、小鳥のスカートがふわっと浮き上がった。





「きゃっ！」

小鳥が大慌てでスカートを押さえる。

なかなかの反射神経だ。

すぐに隠したから、たぶんノーパンだと気づいた奴はいないだろう。

もっとも、悲鳴を上げたから何人かはこっちを見たが……。



「う、ううっ……見えちゃったかも……」

「大丈夫だ。 見えてたらちょっとした騒ぎになってる」



「そ、そうなる前に帰ろうよお」

「そういう顔していると逆に怪しまれるぞ」

「スカートも押さえすぎで不自然だ」



「で、でも……」

「そんなに押さえてると、かえってノーパンだって周りにアピールしてるようなものだろう」

「もっと自然でいいんだ。 自然にすればな」



「う、う……」

涙目になりながらも、小鳥がスカートから手を離す。

今日は風が強めだってことを考えると、別に押さえてたって不自然じゃないはずなんだが、簡単に俺の言葉を信じてしまったらしい。

自分が鬼畜な人間だと思ったが、こういう楽しみはやめられなかった。

こういうふうにいじめられるのが、小鳥の魅力のひとつだった。



「ひっ……」

「ん？」



「今、風が……」

「今のは大して強くないだろう」



「で、でも……」

この表情がたまらない。

背徳感みたいなものがわき上がってくる。

今日は風が強いから、きっとさっきの1回だけじゃ済まないだろうな。



「あ……」

なんて考えてるうちに、また強い風が吹いた。

小鳥のスカートがふわっと浮き上がって、俺の位置からでもちらっと何も履いてないお尻が見えた。



「ひゃあああああッ！！？」

小鳥が裏返った悲鳴を上げながら、大慌てでスカートを押さえる。

さっきよりも大きく捲れ上がったから、当然と言えば当然の反応だ。

近くの通行人が一斉に視線を向けたけど、小鳥はそれどころじゃないはずだった。



「う、うっ……やっぱりい……」

「大丈夫だ。見られてない」



「荒浜さん……恥ずかしいよお……」

「そんなに恥ずかしいか？」



「恥ずかしいに、決まってるよお……」

「だが……結構濡れたりしてるんじゃないか？」



「そ、そんなこと……」

小鳥が恥ずかしそうに否定するが、両脚はもどかしそうに擦り合わされている。

本人は未だに認めていないが、実際はこういうプレイで感じる体質なのだ。

羞恥プレイに快感を得る女の子なのだ。

心は否定しても、体が求めている……。

他の女にはない魅力が、そこには確かに存在していた。

「ほら、スカート押さえっぱなしだと不自然だぞ」



「でも……や、やっぱり……」

「大丈夫だ。大丈夫。大丈夫大丈夫」





「ううっ……」

根拠のない大丈夫という言葉信じて、小鳥がスカートから手を離す。

——と、



「ひゃわっ！！？」



「やっ、あっ、わあああッツ！！！」

風で捲れたスカートを、小鳥が慌てて押さえつける。

前が見えてないか、後ろが見えてないか、頭を前後させながら確認している。



「もうやだあ」

「大丈夫だ。 見えてない」



「見えてるよお。 絶対1人くらい見られてるよお」

小鳥が半泣きを超えた泣き顔になっている。

そろそろ切り上げないと、本気で怒られてしまいそうだ。

まあ、ここまでやったら、体のほうは十分に興奮してるだろう。

あとは、小鳥をその気にさせるだけだった。

「今、どんな感じだ？」



「ど、どんなって……恥ずかしいよ」

「濡れたりしてるのか？」



「それ、は……」

小鳥が弱々しく体を震えさせる。

恥ずかしがりながらも、マンコが感じたのは間違いないだろう。

さっきから脚をもじもじさせてるのは、マンコから愛液が垂れそうになってるからだ。

「どれ、普通に立ってみろよ」



「や、やあっ……」

「ちょっとだけだ。ほら」



「あああ……」

小鳥の手をスカートからどけさせる。

——と、太ももを透明な愛液が伝っているのが見えた。

誰かに見られたかもしれないってスリルが、小鳥の体に快感を運んでいたらしい。

「やっぱり濡らしてたな」



「ち、違うの……これ、はあ……」

「見られたかもしれないって考えて、それでドキドキしたんだろ？」

「ドキドキしたら、マンコが濡れてきたんだろ？」



「う、ううっ……」

小鳥が恥ずかしそうにうつむく。

どうやら図星らしい。

今、心の中では何を求めているのか、俺には手に取るようにわかった。

「どうしたい？ 俺にどうしてほしい？」



「そ、それは……」

「このまま小鳥の家の前まで送って行ってやろうか？ 俺は優しいからな」



「ぜ、全然っ……優しくない……」

「だったら、どうしてほしいんだ？ 言ってくれなきゃわからないぞ」



「い、いじわるう……」

小鳥が責めるように見上げてくる。

気持ちはわかる。

本当は何を求めてるか、俺が見抜いてるってことを、小鳥はわかってるはずなのだ。

だが、だからこそ、あえてそれを言わせたい。

小鳥に正直に話させることで、俺の興奮は高まるのだから……。

「どうする？」



「う……し、して……」

「何を？」



「も、もう……お、おまんこ……こ………」

「なんだって？」



「だから……お、おまんこ……疼いて……もう……もう、我慢できないの」



「荒浜さん……が……小鳥の、おまんこ……気持ち良くして……」

小鳥がか細い声で言う。

太ももを忙しく動かして、愛液がどんどん垂れているのが見えた。

もしも、誰かに見られたりしたら、きっとお漏らししてると思われるだろうな。

さて、どうしたものか。



「荒浜さん、お願い」



「荒は———」



「あ……」

ぶわっと浮いた。

浮いたというか完全に捲れ上がるほど、強い風が吹き抜けた。

丸出し。

小鳥のマンコもお尻も、完全に周りに丸出し状態になった。



「ひゃわあああああああああああああああ——
——ツッ！？！？！」

小鳥が絶叫しながらスカートを押さえる。

強い風だったから、周りでも幾つか悲鳴みたいなのは聞こえていたが、さすがに小鳥のが一番大きかった。

捲れていた時間は、おそらくは1秒にも満たなかっただろう。

誰かに見られたかどうかはわからないが、小鳥はもう限界のようだった。



「あ、荒浜さんっ！ こっち！」

「おっと」



小鳥が俺の手を引いて、路地裏のほうへと移動していく。

周りの通行人達が目を向けていたが、特に声をかけられるようなことはなかった。

「それじゃあ、ご要望にお答えするか」





「ん、ふっ……あああああツツ！！！」

小鳥の体を壁に押し付けるようにして、俺はいきり立ったチンポをマンコの中に突っ込んだ。



「あああっ、入って、くるぅ……ツ！」

「うおっ、ものすごく濡れてるじゃないか」

「これは……想像以上だな」



「ん、んうっ、く……ふうんっ……ん、ん、んんんうっ！」

俺のチンポに、小鳥の濡れそぼった肉ヒダが絡み付いてきていた。

柔らかく、それでいて熱い感触に、思わず腰をぶるりと震わせてしまう。

「やっぱり感じてたのか？ 街中をノーパンで歩いて興奮したか？」



「そ、そんなこと、ない……ん、ああっ！」

「正直に言わないとチンポ抜くぞ」



「あ、だめ……それは……だめえ……」

小鳥が切なげな声で訴えてくる。

今、チンポを抜かれたら、自分でもどうすればいいのかわからないのだろう。

「本当はどうだったんだ？ 興奮して感じてたか？」



「そういう、わけじゃ……あ、ふあっ……！」



「ただ……ドキドキ、して…… んんっ、おまんこが、あ……むずむずして……ん、んうっ……！」



「荒浜さんに、触って、ほしくなって…… それで……お、お……おちんちん、を……入れて、ほしかった……」



「あ、ん、ああっ！ ん、ふあっ、あ、ひあんっ！ ん、ん、んんんんっ！！」

腰を素早く前後に動かすと、小鳥の口から甲高い悲鳴が上がった。

子宮をゴツゴツと突かれる刺激に、声を抑えることができないようだった。

マンコをきゅうきゅうと締め付けてきて、動くたびに快感が広がってくる。

カリの部分が肉ヒダと擦れる感触が、言葉にできないほど気持ち良かった。



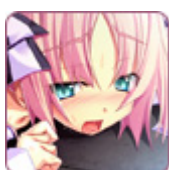
「はあ、うっ……ん、ん、んくっ……あ、んんっ……！」

「濡れてるから、最初から動きやすいな」



「荒浜、あ……さんっ……ん、ん、んううっ……！」

「あんまり声を出すと、誰かに聞かれるかもしれないぞ？」



「や、あっ……ひいんっ……！」

「どうだ？ 気持ちいいか？ これが……欲しかったのか？」



「ん、ああっ……これが、いいっ……ああっ、これが、欲しかった……ッ！」



「気持ちいいっ！ あ、あっ、おまんこ、気持ちいいよお……ッ！」

嬉しそうな声で鳴きながら、小鳥が体を震えさせる。

路地裏とはいえ近くに人がいるってのに、全然ボリュームを抑える様子はなかった。

もっとも、俺としても声を出してくれたほうが興奮する。

誰かが来たときは一目散に逃げればいいし、そういうスリルも楽しかった。

今よりもっと小鳥の声を聞きたかった。

「乳首もビンビンに勃ってるな」

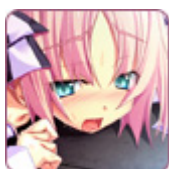


「ひゃああっ！？ 乳首、つ、摘んじゃ……あ、んああっ！！」

「こういうのが気持ちいいんだろう？ 好きなんだろう？」



「あ、くあっ、ふっ……ん、んんっ……う、ひいんっ……！」



「おっぱ、い……あんっ、コリコリ、しちゃ……あ、あ、ああっ……！」

小鳥の胸を責めながら、腰を前後に動かし続ける。

チンポが肉穴の中をズボズボと行き来して、下半身全体に心地良さを伝えてくれた。

それにしても、本当に愛液でぐっしょりと濡れたマンコだ。

締め付けは強いはずなのに、簡単にチンポを動かすことができる。

カリは窪んだところに何度も引っ掛けて、それがとても気持ち良かった。

「んっ、く……うっ……！」



「あ、あっ、ふあんっ！ あ、んんっ、ひああんっ！ あああんっ！！」



「気持ち、い、ひいっ……ん、くうっ、すごく、んんっ、感じる…… ん、ふあああっ！！」

「あんまり大声出すと、周りに聞こえるかもしれないぞ」



「あっ……！？」

ここが街中だってことを思い出して、小鳥がビクッと体を震えさせる。

マンコもきつく締まって、チンポがさらに気持ち良くなった。

「んっく……怖いのも、感じるだろう？」



「あ、んあっ、か、感じ、るっ…… んあっ、おまんこっ、気持ち、い、ひいんっ……！」

「んくっ、くっ……んんっ……………！」



「ああんっ、い、いいっ！ それ、あ、そこっ…… 当たるの、ん、んんうっ……きも、ち、ひいんっ……！」



「もう、んあっ、がま、んっ……んんうっ…… あ、あ、ああああ……………ッ！」

小鳥のマンコの中がどんどん濡れてくる。

チンポの周りに愛液がまとわりついて、動くたびにグジュグジュと湿った音を立ててくる。

この快感がたまらない。

心地良さに体が震える。

射精感は緩やかに込み上げてきて、チンポは痛いほどに硬くなってしまっていた。



「んひいっ！？ お、おっぱい、ああっ…… おまんこっ……い、いいっ！ 気持ちいいっ！！」

「くうっ……すごい締め付けだな」

「この辺りが……いいんだろう？ ここが、感じるんだろう？」



「ふああっ！？ そこっ、いいっ！ あああっ、そこいいっ！ 感じ、んっ……くううんっ！！」

小鳥が犬のような声で鳴く。

マンコの中を激しく痙攣させて、気持ち良さそうに頭を左右に振り乱す。

さすがに、本当に誰か来ないかと緊張したが、今のところ近くに人の気配は感じられなかった。



「ふああっ……ああっ、んんっ……！」



「気持ち、いっ、ああっ……荒浜さん、のお……お、おちんちんっ……！」

「感じるだろう？ 俺のチンポは最高だろう？」



「かん、じっ……ひんっ、さいこ、お…… ああっ、おちんちんっ……すごく、いいっ……！」



「ふあああああああああああああ……………ツツ！！！！」

小鳥がうっとりとした表情を浮かべる。

マンコをきつく締め付けながら、大きく体を仰け反らせる。

結合部からは愛液が染み出していて、足元の地面に大きなシミを作っていた。



「あんっ、ふあんっ！　すご、ひっ、奥につ……　んんうっ、奥に、くるっ……ん、きてるっ……！」



「体、あ……揺れ、て……　ひあああっ、気持ち、よす、ぎっ……んあああっ！！」

「このまま……一気に、いくぞ……ツ！」



「あ、ああっ、きてっ……小鳥の、んんっ、中に……　ふああっ、小鳥の中にい、きてええ……ツ！！」

「んっ……んっ……んんんんっ……………！」

両脚を踏ん張って腰を動かし続ける。

チンポは濡れたマンコの中を激しく出入りして、一番奥にある子宮を突き回していた。

気持ちいい。

こんな場所でも——

——あるいは、こんな場所だからこそ興奮しているのかもしれない。

パンパンに膨らんだチンポは膣の中をほじくるように責めていて、腰を前に突き出すたびに快感が広がってきた。

射精の瞬間が近づいてきていた。

「くっ……もう、イケそうだ」



「あ、ふあっ……ん、んんっ……ううんっ……！」

「このまま、中に出すぞ。小鳥のマンコに出すぞ」



「う、うんっ……いいよっ……あっ、ああっ、小鳥の…… 小鳥の、おまんこに出して……ッ！」



「小鳥のおまんこに……んふああっ…… せ、精液……全部……全部出してええッ！！」

「くううッ！」

小鳥の腰を掴んでチンポを突き続ける。

強烈な快感が広がってきて、下腹部の奥を熱いものが暴れていた。

早く射精したいという感覚が、俺の中に広がってきていた。



「ああっ、いいっ！ 気持ちいい、ところっ…… んああっ、擦れて……あ、あ、あぁあッ！！」



「荒浜、さんっ……荒浜さんっ……荒浜さんんんっ！！」

「んっ……！」



「おまんこ、熱いっ……んふあっ、もうっ……これ…… あふあっ、ひいんっ……すごい
よお……ッ！」



「小鳥っ……このまま……あ、ああっ、あっ…… このままっ……ああ………ッ！」

「もう、イクぞ……ん、くっ……小鳥の中に……本当に、出すぞ……ッ！」



「出してっ！ 小鳥の、中に……んんあっ、出してっ、全部っ…… いっぱい……ああっ、せー
えきいい………ッ！」



「あ、ああっ、あ……あああっ、あ、あ、ああっ……ああっ…… ああああっ……あああああ
ああああ………ッ！！！」

「うっ」



「あああああああああああああああああああ——
——ツツツ！！！！！」

腰を前に突き出して、小鳥のマンコで射精した。

膣の奥深くに精液を注ぎ込んでいった。

心地良さに体が大きく震える。

全身がふわりと浮いたような感覚に陥って、俺は思わず絞り出すような声を漏らしてしまっていた。



「はあああ……あ、ああ、ああ……あああ……」

「くううつ……」



「きも、ち……いひい……」

チンポが絞られるような快感を覚えながら、腰を前に突き出し続ける。

肉ヒダの感触が延々と伝わってきて、すぐにはチンポを抜く気になれなかった。

この快感を果たしてどう表現すればいいのか。

頭の中でぼんやりと考えながら、俺は射精の快感を味わい続けていた。

やっぱり、セックスは最高のコミュニケーションだった……。



「見られてないっ！？ 誰にも見られてないっ！？」

「大丈夫だ。誰も見てない」



「ううっ、見られてたら学校退学になっちゃうよ」

「スリルあるセックスだったな」



「絶対もうしないからねっ！」

「わかったわかった」

行為が終わってパンツも穿いて、小鳥が顔を赤くして抗議してきた。

さすがに今回ののは羞恥心が限界を超えたらしい。

もうパンツを穿いてるのに、スカート後ろのほうをちらちらと気にしていた。



「荒浜さんがこんな変態さんだったなんて知らなかった」

「今更だろ。 最近は、外でやることのほうが多かったくらいだし」



「でも、こんなの……」

「それに、小鳥だってノーパンで歩いてすごく感じてたみたいじゃないか」



「か、感じてたっ……わけじゃ……なくて……」

「濡れてたよな？」



「それ、は……その……」



「だ、だって……あんなの、初めてで…… なんか……へ、変な……気分……」

結局のところ、小鳥はそういう体質だったことだ。

恥ずかしい思いをすればするほど感じる。

今は、もう二度とやらないって言うけど、しばらく時間が経つとまたしたくなるかもしれないな。

……楽しみだ。



「ううっ……」

「そう膨れるなよ。 機嫌直せって」

「お互いに気持ち良くなれたんだからいいじゃないか」



「気持ち……良かったけど……でも、なんか……………」

「アイスでも食うか？ 奢るぞ」



「食べるっ！！！」

小鳥がパッと表情を輝かせる。

わかりやすい奴だ。

食べ物ひとつで嫌なことも忘れてくれるから、扱いやすいと言えば扱いやすかった。

「んじゃ行くか。 店は任せるぞ」



「うんっ！」

2人で並んでアイス屋へと向かう。

ここから先は、いつも通りの時間の始まりだった……。